

センタージャーナル

■ 発行人 / 荒山 淳
■ 発行所 / 真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016
名古屋市中区橘二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを

真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。



輪島の朝市通りの火災現場近くに、類焼は免れたが半倒壊した真宗大谷派寺院がある。
2024年4月3日撮影 ※一部加工しています / 写真の無断転用はご遠慮ください

もくじ

- ・ 聖典研修
『教行信証』撰述の願い ②・③
最終回 真実の信
- ・ 研究報告
「第35回 平和展」 ④・⑤
- ・ 研究報告
グリーンケアを学ぶこと ⑥・⑦
と仏教の課題
- ・ INFORMATION ⑧

なれ 汝はそも 人間なりや 春の地震

能登半島地震から半年以上が過ぎた。抗うすべのない自然災害。名古屋に身を置きながらも東日本大震災と同じように大きな揺れを感じたことを今も、この身が覚えている。驚異的な自然力に人間は無防備で無力だということとを改めて突き付けられた。同時に大陸の地は、親鸞聖人・蓮如上人が教化なされた真宗土徳の地でもある。

二〇〇七年、能登震災後、同朋会館へ教化センター研究生とともに真宗本廟奉仕に入った時のことである。昏時修行後の感話に能登教区の推進員が立たれた。

「今回、奉仕団に参加するかどうか、大変迷いました。自宅は半倒壊、外に投げ出され呆然自失の毎日が情けなくて。そんな自分を見かねて母ちゃんが『行ってこい。こんな時だから行ってこい』って。『あんた親鸞さん好きだからあ、親鸞さんに会いに行ってこい』って言ってくれたんです。私の背中を押してくれた母ちゃんがいたから、ここに来れました。本当に不思議なことです。この地震で多くのものを失いました。けれども人間にとって本当に大切なこと、引き継がれ手渡されてきたものを勝手に止めることは出来ません。

壮大な無量のいのちの営みの中に、私が生かされていたのだと、震災を経験し初めて気づかされたことです。情けなくも恥ずかしいことです」と、涙ながらに感話された肉声が17年経っても耳朶にのこる。

人間存在の本来の意義を、この世に生きる名もなき者、死者たちから問いかけられ案じられていることが地震後、よりいっそう深く問われているように思えてならない。

汝はそも 人間なりや 春の地震
(石牟礼道子『色のない虹』より)

今、この句が我が身の実存の大地を揺るがす。本来のいのちは人も青草も、大宇宙の大自然の中、育まれ支えられ繋がってきたいのちである。なのに近代以降、人間のエゴが関係性をズタズタに分断し、毒の雑じった人間心で、「安心・安全」という美名の社会を創り上げた。慚愧なき傲慢な行為に対し「汝はそも人間なりや」と、如来の怒りが問いとなって我に向かう。

復興には相当な歳月を費やさねばならぬ。10年、20年先までも、怒りにまななつた如来の問いを聞き続けることが出来るのだろうか。

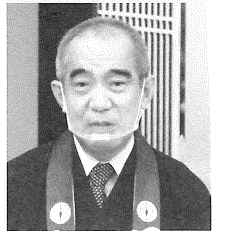
今、私に出来ることは、17年前に聞いた推進員の肉声の如く、耳を傾け繋がりを感し続ける「場」と「時」をもつこと。御同朋の切実な声が私を繋げてくれた。
(主幹 荒山 淳)

聖典研修
2021年7月12日

『教行信証』撰述の願い

最終回 真実の信

講師 一楽真氏いちらくま（大谷大学教授）



※文中の頁番号は、『真宗聖典』第二版

念仏は諸仏の勧めを聞くこと

今日は「信卷」のお話を申し上げます。お釈迦さまを筆頭に、法然上人をはじめとした七高僧が、阿弥陀に出あえ、ということ、念仏申せということをお勧めしておられます。だから私が南無阿弥陀仏となえること、それは諸仏のお勧めを聞いていくことです。親鸞聖人は三十五歳で法然上人とお別れになった後、越後、関東でも、念仏しておられた法然上人のお姿を思い出し、声がかん中に響いたと思います。自分が南無阿弥陀仏となえる時、法然上人の南無阿弥陀仏が聞こえてきたと思います。

自分一人でお内仏の前で念仏申していても、そこに皆さんを仏法に押し出してくださった方々のお念仏が響いてきませんか。うちのばあちゃん、よくとなえていた。うちのじいちゃん、田んぼで作業しながらとなえていた。日頃いつも思っているわけではありませんが、南無阿弥陀仏する時に、色んな方が出てくる。今日は誰々のご命日だったなどその方のこ

とが思い出されることがあります。となえているのは私です。しかし、私に対して、阿弥陀に南無せよと呼びかけてくださっていることを忘れたらとんでもないことになるぞと知らせてくださる。だからこそ念仏申し続ける。これが私の歩む道だと決まるといふことです。

それは回心という言葉で言ってもいいと思います。親鸞聖人の場合は二十九歳といわれます。回心と言いますと、私にはある瞬間のことに定めようとする思いが起きますが、親鸞聖人は二十九歳の年、百日間、六角堂に籠られ、百日間、法然のもとに通われた。私はあの道しかないとはっきりしたとおっしゃっているのが、「雑行を棄てて本願に帰す」（四七四頁）という表白です。もつと言えば、それまでに二十年の比叡山の修行で助からなかったということがあるわけでしょう。それを踏まえての二十九歳です。だから回心をどこかの瞬間に定めようというのはあまり思わない方がいいと思います。やはり決まるのには時間がかかるのです。念仏一つということがものすごくいただけの日もある。また、やはりほかのことをプラスした方がいいのではないかという

ふうになが揺れ動く。そういうふうなことで、どうやってみても道は開けないというわが身が見えた時に、いよいよ、やはりここだったという形で戻ってくるということがあります。それを体験主義のようにあまり振り回さない方がいいと私は思っています。

仏は呼びかけを聞く人のところにいる

私たちは阿弥陀仏に南無せよ、と呼びかけられている。でも聞くということがなかったら、呼びかけがないのと一緒です。

私は石川県の小松のお寺に生まれまして。小学校にあがる前から「正信偈」を覚えていましたが、それは親父が褒めてくれるからで、いよいよ得度という歳ぐらいになったら、ぜんぜん本堂に座らない子どもになっていました。一番本堂に行かなかったのは中学、高校の時です。高校の時はどうやってお寺を飛び出すかばかり考えていたかもしれせん。ただ、父のお朝事のお勤めを毎日、寢床で聞いていました。ひどいもんです。南無阿弥陀仏を私への呼び声と思っていなかった。

声は聞こえています。それは、阿弥陀仏に南無せよ、という私への呼び声ではなかった。それが呼び声となったのは大谷大学に入ってだいぶ経ってからです。呼びかけは家の中にも充満していたんで

す。しかし、それは私が聞かない間は私への呼びかけではないのです。ただの音です。阿弥陀に南無せよということが私に響いてきて、ああそうなのかということが届いたところに、呼びかけの意味を持つのです。受け止めた人のところに呼びかけはあるのです。

阿弥陀さんは呼びかけを聞いている人のところにいる。ただ南無阿弥陀仏となえてい、そこにい、と言ってもいいのですが、となえるのにもいろいろあって、ただ音だけ出している場合もありますから、その言葉が呼びかけとして届いているかどうかは別問題です。聞いているところに阿弥陀はいるのです。それが行と信を離さずにおっしゃる意味です。聞いてくれる人がいなかったら、仏さんといえどもはたつきようがない。これが親鸞聖人が信心を大事にされる理由です。

誰かの南無阿弥陀仏の声によって、はからずも別の人が頷くこともあります。南無阿弥陀仏というのは、誰がどこでとなえても、阿弥陀に南無せよという呼び声だということが大事です。

普通に考えたら、信心はあって当然なわけです。信じて行ずるということです。しかし、親鸞聖人はその信心が甚だ怪しいというわけです。私たちが成仏とか解脱という言葉を使ったとしても、それがどういふことかというのは実は怪しいのです。そういう意味で、私たちの信心は

真実ではない。だから「信巻」は「行巻」の前ではない。信があつてそれから行があるのではないのです。呼びかけられて、ああそつたのかと気付かされて、分かるわけです。だから信心という言葉で親鸞聖人は信心とおっしゃいます。これは、はつきりと知りました、という意味です。

無条件ということに領くことが、難い

「信巻」冒頭では、
然るに、常没の凡愚、流転の群生
(二三七頁)

と我々のことが述べられています。常没というのは、常に迷いの海に沈没してどつぷりとはまっています。そして縁の中で迷い苦しみ傷つけあいが続いている凡愚だといわれます。一生懸命生きていくつもりでも、結局は世の中の流れに流されて転がされている。何とかこの事態を収束しないといけないと一生懸命になる、その正義が人間を苦しめるんですよ。

ただそういうものが、

無上妙果の成じ難きに不ず (同)

とある。仏教の常識から言えば、常没の凡愚、流転の群生はさとりを開けないというのが仏教の常識です。ところが、無上のさとりは常没の凡愚、流転の群生の上にも成り立つ。ただそこに入っていく入り口が大問題です。それが、

真実の信樂、実には獲ること難し。何

を以ての故に。乃し如来の加威力に由るが故なり (同)

です。如来の威力を加えてくださる。如来が我々を迷いから覚まさせようとして、色んなはたらきをしてくださる。そして、
博く大悲広慧の力に因るが故なり (同)

です。これは阿弥陀の本願を指しており、
ます。ですから、阿弥陀の本願に出あうということが不可欠なのです。

それに出あえば誰の上にも無上妙果は成り立つんですが、それだからこそ、また出あい難いんです。私が何とかしたいとか、私の能力で迷いを超えていきましようという間は、絶対に真実の信樂は獲られないです。

本願の世界に領くこと、そのこと一つです。ああそつたのかと、これだけです。人間が考える条件付けは一切ありません。能力も経歴も素質も関係ない。無条件なのです。ただ、無条件ということに領くということは要るのです。これが難しい。無条件なんてあり得ないと、皆が平等に助かるなんて胡散臭いとなる。

皆が平等に助かる船、その船に乗せてもらおうと思うのですが、俺は長年聞いてきたから一等客席だ、という根性があるんですよ。この問題は、乗ると決めたところに起こる。「化身土巻」に述べられます。それは阿弥陀の船に乗ろうと思いつながら、結局、別の船に乗るとい根性なのです。しかし、化身土はそう言うて

いる人間を排除する為に説かれるのではなく、本当に誰もが平等に乗ることができる船に出あつてほしいね、どんなものも見捨てないという世界を受け取ってほしいね、という為の教えです。

如来よりたまわつたといふ言えない

「信巻」のもう一つキーワードが金剛心です。ひとたび獲てもそれが失われていくという問題があるからです。念仏一つに本当に生きるかどうかということが、このことを確かめていくことが金剛心の課題です。金剛というのは、壊れない堅さ、何にも染まらないという純粹性という言葉です。世間の様々な誘惑にまみれてしまわない、これが金剛心です。

「正信偈」に「信樂受持甚以難」(二二八頁)とあります。受持することが難しいといいますが、「持」は「たもつ」という意味です。人間はこれが大事だと気張るのですが、長続きしないのです。私が発したような信心は、また別の誘惑がやってくればそつちになびいてしまう。私が発した信心は、金剛には絶対ならないのです。

「如来よりたまわつた信心」(七八二頁)といわれます。如来回向の信心として親鸞聖人がこの信心をおさえていかれる、一番大きな意味です。本当に仏道を歩み続ける、共々に迷いを超えるということを課題にし続ける、こんなことがど

こで成り立つかと言つたら、私の中から出てくるものではなくて、如来からたまわつたといふ言えないのです。

「信巻」後半にいけますと、阿闍世の物語が説かれます。阿闍世が自分に発つた目覚めを、

無根の信 (三〇二頁)

といっています。私に起こつた心だけれども、私が発したとは絶対に言えないのです。

阿闍世の物語は、真実信心、金剛心の一番の具体例として親鸞聖人が見ておられる物語です。二千五百年程前のインドで実際に起つた事件でありますけれども、親鸞聖人は阿闍世を昔の人とは見ておられません。煩惱に振り回される凡夫の姿を見ておられる。もつとはっきり言えば、自分自身と阿闍世を重ねて見ておられるということ。傷つけあうような生き方を止められないからこそ、教えられ続けられないといけない。だから、金剛心といつても自分がブレなくなるのではないのです。

信心の利益として「信巻」でいわれているのですが、それが伝統的な仏教の課題に返せば、無上妙果に至るといふ、真実のさとりです。だから私たちが信心獲得して生きていくこと以外にさとりを追い求める必要はないのです。信心獲得して生きる、そこに仏教の全部があるといふことを親鸞聖人は明らかにしてくださっているのです。(文責編集部)

研究報告

「第35回 平和展」

真宗大谷派の海外侵出 ― 「満州開教」(後編) ―

新野 和暢

はじめに

「第35回 平和展」(日程…三月十九〜二十五日)を開催しました。今回は「真宗大谷派の海外侵出―「満州開教」(後編)―」と題して、大谷派が「満州」と呼ばれた地域(現中国東北部)で行った開教を取り上げました。戦前に大谷派が行った海外開教の中でも「満州」での開教は設置した開教施設数も多く、活発に活動した地域でもあります。当時の大谷派は、大陸で真宗を伝えることを試みた一方で、日本の植民地支配に加担した歴史を持っています。その事実を確認し、現代の平和問題を考えました。

「後編」の範囲

今回のテーマは、昨年開催した第34回平和展「満州開教(前編)」(「センタージャーナル」No.115で報告)を引き継ぐ内容です。「前編」は「満州事変」(一九三二年九月十八日)までの期間を取り上げ、日清日露の両戦争に従軍した布教使との関わりを通じてこの地域での活動が始まり、「南満州鉄道(満鉄)」とその沿線に拡大していった日本の利権に伴って活発化した開教を確認しました。今回の「後編」はその後、日本の傀儡「満州国」

を立ち上げ、宗教工作や日中戦争に關わった敗戦までの期間に注目して資料調査をしてきました。「後編」で取り上げる時期で注目すべき活動は、「満州国」内で活動していた布教使と現地の宗教者との関わりにあります。日本の意のままに「満州国」を操ったように、現地の宗教を傀儡化する工作も企てられました。

「満州」での「侵略犯罪」

「満州」と呼ばれた現在の中国東北部には、清という国がありました。日清戦争(一八九四年〜一八九五年)で戦った相手国です。日清と日露の両戦争で「満州」における利権を獲得していった日本は、大連や長春、哈爾濱といった主要都市などを結ぶ鉄道「南満州鉄道(満鉄)」を運営し、この沿線を中心に「植民地経営」をしていきました。そして、「満州事変」という日本軍による謀略をきっかけにして一挙に軍事侵攻し、傀儡の「満州国」を設立しました(一九三二年三月一日)。

この頃、「満州」を支配する日本に抵抗する現地の人も居ましたが、日本は武力で鎮圧しました。撫順郊外(平頂山)で一九三二(昭和七)年九月十五日に起こった「平頂山事件」では、六〇〇名〜三〇〇

〇〇名にもものぼるとされる住民が日本軍守備隊によって虐殺されています。抗日武装組織(遼寧民衆自衛軍)による撫順炭鉱襲撃の報復で、平頂山集落が彼らと内通しているとみなしてのことでした。この他に、細菌兵器の研究・開発・製造を行った日本軍の「七三一部隊」を哈爾濱郊外に、また、化学戦(毒ガス)部隊の「五一六部隊」を齊齊哈爾に設置しました。これらの施設では人体実験など、人道に悖る「侵略犯罪」が行われたことが明らかになっています。

宗教統制と「募兵」

こうした社会を背景にどの様にして傀儡化を試みたのでしょうか。「満州」と呼ばれた地域では土着の民俗宗教に加えてチベット仏教(喇嘛教)が信仰を集めていました。それは、一六三六年に女真族(満州族)が建国した王朝、清国の皇帝(愛新覚羅氏)が信仰していたことも影響しています。ラマ(喇嘛)と呼ばれる師僧「活仏」を尊崇することを特徴に持つ信仰形態のため、ラマ教(喇嘛教)とも呼ばれています。「満州国」政府は、この「活仏」を利用しながら、トップダウンの組織を作って統制し傀儡化することを試みました。

「満州国」の宗教政策を知る上で重要な法律に、「暫行寺廟及布教者取締規則」があります。一九三八(昭和十三)年に公布されたもので、政府の意思により寺廟を廃止することができる内容が盛り込ま

れる宗教弾圧法でした。当初、チベット仏教は対象外でしたが、一九三九(昭和十四)年十一月十六日に同規則が改訂され含まれました。これは、「満州国」の徴兵制である「国兵法」が一九四〇(昭和十五)年四月一日に公布されることを見越した内容と言えます。

「ラマ僧」を徴兵するためには、不殺生戒を捨てさせる必要があります。軍人には殺人行為が伴います。そこで、戒律を重んじる「ラマ僧」を「募兵」するために、「喇嘛活仏」を利用しました。一九三九年二月九日、「満州国政府」は十人の「喇嘛活仏」と懇談して、「喇嘛教教義上の募兵忌避態度の是正を要求」し、三月一日から「募兵」が開始されました。

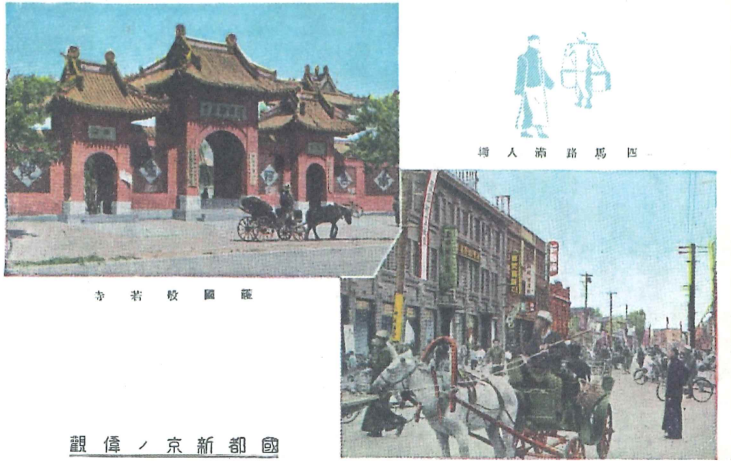


日本軍戦死者のみを対象とした慰霊大会が傀儡となったチベット仏教(喇嘛教)団体により営まれた。その様子を伝える当時の「大阪毎日新聞」号外(部分)。

傀儡仏教会

「満州国」内には、傀儡の仏教会が設置されました。代表的なものとして、「満州大同仏教会」（一九二九年設立、中国固有の仏教会を改変した）、「仏教護法会」（一九三四年設立、本部を哈爾濱の極楽寺に置いた）、「満州国仏教総会」（一九三九年五月二十六日発会、本部を「新京」の般若寺に置いた）がありました。

「満州国仏教総会」は、土着の宗教者と日本僧侶で構成された組織で、日本僧侶の支配下にありました。「満州国軍」や



寺若教國臨

觀偉ノ京新都國

傀儡仏教会「満州国仏教総会」の本部が置かれた般若寺（左）や「新京」（現長春）の街の様子がデザインされた当時の絵葉書。

「皇軍（日本軍）」などの慰霊祭や葬儀に参加させたり、「満州国」育成を翼賛したりすることが活動目的に置かれました。軍用機の献納運動など軍事的な協力も担ったのです。

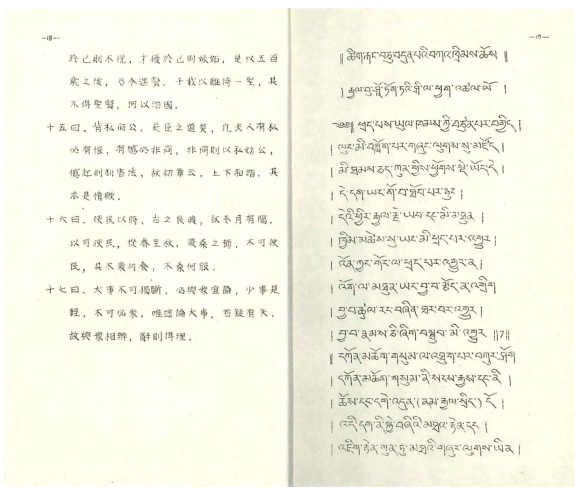
そして、宗教新聞『中外日報』の一九四〇（昭和十五年）年四月二十一日号によると、傀儡の「満州国ラマ教宗団」を結成させ、日本の「天皇制」を受け入れさせようとした宗教工作が報道されています。

現地宗教との関わり

宗教政策の方向性は現地の宗教を日本化し、日本に協力する僧侶へと転換させることにありました。傀儡化の政策実現にあたっては、日本仏教が携わりました。大谷派は一九三七（昭和十二年）七月七日に日中戦争が始まると開教使を中国の戦場に派遣して戦争に関係していきましました。日中戦争勃発後の一九三七年七月七日から同年十月末までに任命された慰問使、従軍布教使は三十三人いました。その約半数の十七人が「満州国」在勤者でした。従軍僧は、宗教儀式の執行だけでなく、通訳も担ったことが知られています。

直接的に「満州国」内で宗教工作にあたりましたが、チベット仏教に対する宗教工作は、仏教学者の存在が大きな影響を及ぼしました。例えば、大谷派のチベット仏教学者、寺本婉雅（一八七二～一九四〇、大谷大学教授）は、チベット仏教の改革を提唱したり、共産党やソ連（現在のロシア）を「仏教的怨敵」とする論

を打ち出して、日本とモンゴル、チベットの仏教徒が親善すべきだとする内容の『日華全体仏教徒提携親善書』（一九三九年九月二十五日）をチベット語に翻訳発行したりしました。また、彼の教え子の加藤清は、一九四〇（昭和十五年）年四月一日に開教使に任じられ、同月八日にチベット仏教研究の為に「満州国」へ渡って、チベット仏教の学林「瑞應寺」内に「ラマ仏教学院」を開設しています。日本に協力的な「ラマ僧」を「進歩派」と呼び、非親日派に時代遅れのレッテルを貼って、「天皇礼拝・侵略肯定」を根幹に置いた当時の「親鸞主義」をもって日本の教育を用いたようです。費用は「官



宗教工作として、仏教徒の提携を呼びかける内容の書物が中国語、チベット語で発行された。それらは日本仏教の優位性を説くものだった。写真は聖徳太子の『十七条憲法』を取り上げた紙面。

が負担するものである点を含めて考えると、純粹に学問を求めるものではなく、宗教工作の実践の一つであったとみることができるとでしょう。ただ、その設置等に当たっては、多くの「ラマ僧」が反対するなど、抵抗していた事実もあるため、傀儡化は必ずしも成功したとは言えない状況でした。

まとめにかえて

以上の様に、今回の「平和展」で取り上げた内容を振り返ってみますと、一九四二（昭和十七）年八月十五日時点で、この地に五つの別院と七十一の布教所を設置するに到るなど、海外開教全体から見ても大きなウエイトを占めている「満州開教」を知るキーワードの一つとして「傀儡化」があります。その動きについては、調査し「平和展」の成果として公表することができましたが、日本から一〇〇万戸の国民を移民させようとした移民政策など、「開拓地」での活動は触れることができませんでした。よって、次回の「平和展」で取り上げる予定です。

現代は、ロシアによるウクライナ軍事侵攻が二年を越え、また、イスラエル・ガザ戦争も終わりが見えない状況にあります。人権と差別の問題も尽きることがありません。そうした世の中の闇に対して、仏教に生きる私が問われていると思います。

「平和展」の内容を収録したパンフレットをご希望の方は教化センターまで。

研究報告

グリーフケアと真宗教化①
グリーフケアを学ぶことと仏教の課題

吉田 暁正

【1】グリーフケアとは

人生における人やものなどの喪失によって、思ってもみなかった様々な感情や反応が起こることがある。そこにある自分の思いや姿をどのように生きていけばよいのか。また、家族や知人が喪失の中で悩んでいる姿にどのように向き合えばよいのか。このように喪失は、自他ともに様々な影響をもたらすことになる。そして、どのように受けとめればよいのか迷い、苦しむことにもなる。

喪失によって生じる感情や反応は様々な姿があり、それは「グリーフ」と表現される。「悲嘆」と翻訳されることもあるが、意味が限定されてしまうことになるので、そこに現れる多様な姿を確かめていくために、また課題を広く共有するために、「グリーフ」という言葉をそのまま用いることも大切ではないかと思う。

「グリーフ」の定義としては、「人や、ものなどを失うことにより生じる、その人なりの自然な反応、状態、プロセス」と確認しておきたい。また、「グリーフ」には「悲しみ」「怒り」「安堵」「無感動」などの様々な心理的影響、「睡眠や食欲への影響」「体の痛み」「疲労」などの身体的影響、「記憶力や注意力の低下」「非

現実感」などの認知的影響、「学校や会社に行けない」「過活動」などの社会的影響、「生きていく意味の喪失や模索」「信仰への疑問や不信」などのスピリチュアル的な影響がある。喪失による影響は多種多様であり、一人ひとりに現れる姿も違うということを知ることが重要である。

そこで、「ケア」という姿をどのように考えていくかということが課題となる。「ケア」は、支援する、援助するという意味で捉えられることもあるが、与えるという一方のみで考えることは、問題も生じてくる場合がある。「ケア」が一方的な思考や行動になれば、相手を傷つけたり苦しめたりすることにもなる。支えたいという思いは大切であるが、相手の思いも大切にしていくこと、つまり、お互いの思いが尊重されてこそ「ケア」が成り立つのではないだろうか。

その意味では、「ケア」は、支えるもの、支えられるものという関係全体を包み、さらにはその相対的關係を超えて、グリーフを抱えたものが出会う関係そのものにはたらく力として確かめていくことも大切ではないかと思える。そして、その道筋が、真宗教化のあり方を探る方向となるのではないかと思う。

「グリーフ」：人やものなどを失うことにより生じる、その人なりの自然な反応、状態、プロセス。
「ケア」：気にかける。大切にすること。

【2】グリーフに向き合うために

グリーフには一人ひとりの姿があるのと同じように、喪失からの歩む姿も感じ方も一人ひとりである。グリーフは、時間とともに楽になったり和らいだりすることもあるが、繰り返し落ち込んだり、調子が揺らぐことが長く続くこともおかしなことではない。乗り越えた、立ち直ったように思えても、落ち込むこともある。それは、グリーフの自然なプロセスである。このような揺らぎの中にある自分をおかしいと感じたり、責めたりする必要はない。グリーフには、一人ひとりの姿があり、どれも異常ではなく、おかしなことでもない。自分に表れてくるグリーフを、まずはそのままに受けとめてみる。そして、無理に立ち直ろうと考えるのではなく、その思いを抱きながら歩んでいく道を探していくことを大切にしたい。

グリーフとどのように向き合っていくのかを考えていく上で大切なことは、まず、自分に起こっている状態を丁寧に見ていくことである。喪失による反応や影響は、多様であり一人ひとりの姿がある。その姿を振り返りながら、自分の感情の動きや体の状態を辿っていく。グリーフは一時的なものではなくプロセスでもあ

るから、辛くなる時、思いが強くなる時など、揺れ動く自分があることも見えてくる。このように自分自身のグリーフを丁寧に見ていくことで、自分のグリーフの姿を改めて知ることができる。そしてそのことが、グリーフを抱えた自分を感じていく道を開くのである。

またそれは、他者のグリーフに出あった時、どのようにその姿に向き合えばよいのかを考える上で、大切な姿勢を教えてください。グリーフとの向き合い方は、方法や技術でどういかなるものではない。自分自身がグリーフを抱えた一人としてあることを丁寧に尋ねていくことを通して、自他共にグリーフとともに歩んでいく道が見つかるのではないだろうか。グリーフについて知ること、学ぶことの意味はそこにあるのではないかと思う。

グリーフは、立ち直ったら終わりというような一時的なものではなく、「プロセス」。

↓時間とともに和らいだり、落ち込んだりを繰り返すこともあり、揺らぐもの。

*その揺らぎは多様で、一人ひとり違う。

↓まずは、自分に起こっている状態を丁寧に見ていくことが大切。

【3】 グリーフとともに歩む

(1) グリーフワークとしての仏事

「喪失について、また喪失した対象に対して、感じていたりことや想いを表現すること」を「グリーフワーク」という。その表現方法には人それぞれ様々な形があるが、亡くした人のことを話す、亡くなった人が好きだった音楽を聴く、食べ物を食べるなどがある。大切な人を思いながら表現することで、その関係を振り返り、グリーフと向き合っていく道にもつながる。その中に、仏事という宗教的儀礼も大切な営みとして考えられる。

真宗の仏事は、南無阿彌陀仏のはたらきが具体的に形や姿として表現された場である。浄土の莊嚴を具体的な形として表現した場が、寺の本堂であり、各家庭のお内仏でもある。その場に身を置き、合掌する。南無阿彌陀仏を称える。勤行という姿によって言葉にまでなった法に出会う。儀式という表現を通して法をいただくという姿がある。そこに身を置く存在全体を包んで、本願がはたらく。すなわち、あらゆるいのちを無条件に受けとめていく場として開かれているということとを表現している。それは一人ひとりのグリーフの姿をそのままに受けとめていくということであろう。その場が、グリーフとともに生きる力を育み、自分なりの歩みを見つけていくことにつながるのではないかと思う。

年忌法要などの仏事の場合は、亡き人を思い返しながら語り合い、涙を流したり、

笑い合ったり、様々なエピソードとともに浮かんでくるその人に出会い直す時を開く。自他ともにその場を共有しながら、一人ひとりの出会いの縁を大切にしておく時間となればと思う。グリーフはプロセスであり、揺れ動くものである。そして一人ひとりの姿がある。仏事の場を通して、繰り返し尋ねていくところに、グリーフとともに歩んでいく自分なりの姿が生まれてくるのである。グリーフワークとして、仏事を確かめながら場づくりをしていくことを大切にしたい。そこに「ケア」というはたらきが生まれてくるのではないだろうか。

年忌法要、月忌参りはグリーフケアの場となりうる。
仏事として開かれた場が、グリーフとともに生きる力を育み、自分なりの歩みを見つけていくことにつながる。

(2) 仏教の課題

グリーフケアについて学びを進めていくと、すでに仏教が大切に伝えてきた姿ではないかということが見えてくる。また、なぜグリーフケアという言葉で確かめなければならぬのかという疑問も生まれてくる。現代社会において、グリーフケアは、医療、介護、葬儀など、様々な現場の課題として取り組まれている。それほどグリーフの姿も、サポートのあり方も多様化していることの表れであろう。その中で、寺もまた、改めて自らの

歩みを振り返ることが求められているように思う。そして、社会の動きとつながり、寺が寺として動いていくために、「グリーフケア」という言葉を用いながら進めていくことも必要だと考えている。必要としている人に、必要なサポートが届くように、お互いができることをともに学び合いながら進めていける社会になればと思う。そして、グリーフケアが、特別なことではなく、日常の、当たり前前の姿として伝えられたらと願う。

僧侶として生きていく上で、葬儀における死別の悲しみや、老病の苦悩に出会う機会が多々ある。そのようなグリーフの姿に出会うことは、僧侶自身も苦しさを抱えることになる。なんとかしたいと思いつながら、どうにもならず迷うこともある。僧侶もまたグリーフを抱えた一人として生きているという事実がある。だからこそ、自分自身のグリーフを丁寧に見ることが、他者のグリーフの姿に出あった時、どのように向き合っていくのかという道を開くことにつながるであろう。誰もがグリーフを抱えている。その一人として出会い、ともに尋ねていく。それが親鸞聖人の歩まれた仏道ではないだろうか。真宗の学びにおいても、教化のあり方を考える上でも、グリーフケアの学びや動きから見えてくることもあると考えられる。仏教の課題として確かめていくために、まず、グリーフケアについて共有しながら、その方向を探っていくことができると考えている。

なぜ「グリーフケア」という言葉で確かめるのか。
↓社会の動きとつながり、グリーフケアを日常の、当たり前前の姿として伝えたい。
↓誰もが(僧侶も)グリーフを抱えている一人として出あつていきたい。

真宗大谷派では、一般社団法人リヴオンの協力を得て、大谷派教師養成の課題としてグリーフケアの学びを導入し、関係学校、各教区の真宗学院などの教育機関において授業への取り組みが始まっている。本稿は、リヴオンとの共同で開かれた真宗大谷派教育部の研修会、またテキストなどに基づき、筆者の課題と受けとめをまとめたものである。
一般社団法人リヴオン <https://www.live-on.me/>

2023年度「グリーフケア学習会」名古屋教区教化センター主催
第1回 2023年10月30日(月) 15:00~17:00
会場 名古屋別院対面所 参加者 30名
【課題】 グリーフケアを知っていますか？
自分自身の抱える「悲しみ」に悩むことはありませんか？
他者の「悲しみ」にどのように向き合えばよいのか迷ったことはありませんか？
第2回 2024年2月26日(月) 15:00~17:00
会場 名古屋教務所議事堂 参加者 48名
【課題】 グリーフ(喪失による悲嘆)に向き合うために
第3回 2024年5月31日(金) 15:00~17:00
会場 名古屋教務所議事堂 参加者 35名
【課題】 グリーフ(喪失による悲嘆)とともに歩む

研究業務報告 (2023年12月～2024年5月)

①大谷派の近現代史

- 第35回「平和展」開催
(3月19日～25日/教務所議事堂/360名来場)
★内容報告を本紙4・5面に掲載
- 「平和展」特別学習会 開講
(3月22日/別院対面所/約40名聴講)
講師:石濱 裕美子氏(早稲田大学教授)
「日本仏教界の「ラマ教工作」」
- 平和展学習会 実施(12月7日、2月7日、20日、22日)



特別学習会動画



スタッフによる展示の解説に熱心に耳を傾ける来場者。

②尾張の真宗史

- 教区内外の真宗大谷派寺院蔵法宝物の調査を実施

③現代社会と真宗教化

- 第2回「グリーンケア学習会」開催
(2月26日/教務所議事堂/48名聴講)
- 第3回「グリーンケア学習会」開催
(5月31日/教務所議事堂/35名聴講)
- ともに講師は吉田 暁正氏(業務囑託[研究])
- ★学習会の内容を踏まえた「グリーンケア」に関する記事を本紙6・7面に掲載

INFORMATION

◆2024年度 聖典研修(予定)

テーマ 「『正信偈』を読む」
講師:梶原 敬一氏
(姫路第一病院小児科部長・真宗大谷派僧侶)

時間:午後6時～8時
会場:名古屋教務所議事堂
期日:(全五回)

第一回 2024年10月11日(金) 第二回 12月6日(金)
第三回 2025年1月24日(金) 第四回 3月14日(金)
第五回 5月16日(金)

《雑感》『真宗聖典』の第二版が発刊された。今回の本紙は、その赤い表紙の色をイメージした。今の季節(5月下旬)、教化センターの窓からの景色は、木々の緑に占められる。爽やかな黄緑に心が和む▲かの太宰治の文章に初夏の緑を好まないといったのを憶えている。様々な宗教で使われる赤い色は血を想起させる。いま、ここに、このように生きている、その当たり前すぎるものが、宗教の言葉で語られてきたことではないか▲この生存の事実に向き合う眼差しを、赤い血の色が刺激するのかもしれない。(三)

■教化センター

〈開館〉月～金 10:00～21:00
〈貸出〉書籍2週間 視聴覚1週間



■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ

【お東ネット】 <https://www.ohigashi.net>

■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。

研修業務報告 (2023年12月～2024年5月)

①聖典研修「『正信偈』を読む」開講

講師:梶原 敬一氏(姫路第一病院小児科部長・真宗大谷派僧侶)

第三回 1月19日 36名聴講
第四回 3月15日 39名聴講
第五回 5月24日 27名聴講

*全五回/教務所議事堂

2023年度の「聖典研修」は、五回にわたり『正信偈』を学んだ。梶原敬一氏の思い切って聖教を読んでいかれる姿が、親鸞聖人が先人の言葉を受け取りなおし、読み徹していかれる態度に重なるようで、聴いているこちらの問題意識の浅薄さが知らしめられるようであった。

2023年度の講座では、『正信偈』偈前の文から始まり、依釈段「天親章」あたりまで進んだ。2024年度はその続きから、梶原氏にお話しいただく予定。ともに学びを深めていきたい。

★この頁下部「INFORMATION」参照

②特別講座「真宗儀式の教相

—法要式をめぐる—葬儀式」開講

講師:竹橋 太氏(真宗大谷派儀式指導研究所 研究員)

12月6日/教務所議事堂/46名聴講

「真宗儀式の教相」というテーマは、名古屋教区教化センターの長年にわたる課題の一つである。今回の講座は、2021年度「得度式」、2022年度「帰敬式」に続くもので、前回同様竹橋太氏を講師に招き、真宗大谷派が定める三つの儀式に改めて目を向けた内容。

三つの儀式の中でも身近で、多種にわたるのが「法要式」であるが、その中で特に「葬儀式」を取り上げた。現代社会において、どのように死に向き合い、どのような形(儀式)で表現してゆくのか。ごまかしてはられない、避けては通れない課題に向き合う機会となった。

③第14期 研究生(二年目、三年目)学習会

「お勤めと教えの意味を『聖典』に尋ねる～私の悩みを大切に～」
池田 真氏(第13組 萬瑞寺住職)〈5月1日〉
「観経序分に学ぶ～『現代の聖典』を読む～」
荒山 淳主幹〈1月24日、3月1日、4月18日〉
「グリーンケア」12月21日:吉田 暁正氏(業務囑託[研究])
名古屋別院報恩講〈12月13日～18日〉各自参拝
研究生報恩講 勤修〈1月24日〉
真宗本廟奉仕団〈2月18日～19日〉

長尺印刷で被災地支援活動を支援

募金やチャリティーイベントの案内ポスターなど、能登半島地震被災地支援を内容とする長尺の印刷(A2やそれ以上のサイズ)をお引き受けしています。詳細はお問合せください。



支援活動の報告の資料として活用。